

平城京東市周辺ほか出土の 漆紙文書

平城宮跡発掘調査部史料調査室では、以前の調査で出土した漆紙文書を順次再調査しているが、今回、整理の終了した3次分の調査で出土した資料について報告する。

第93次調査出土文書 平城京左京八条三坊（東市周辺東北地域）を調査した第93次調査（1975年）において、九・十坪の坪境小路南側溝SD1155から1点の漆紙文書が出土した。同じ溝からは他に、郷制下の付札を含む木簡合計25点、「法所」「土寺」「紀伊」「都」などと記された墨書土器、人面墨書土器、漆塗小薬壺、漆塗木製匙、漆皮箱、漆塗冠帽断片、漆濾し布、漆容器（土師器皿・杯、須恵器壺、ヒノキ製曲物）、漆刷毛・篋などが出土しており、付近に漆器工房が存在することを想定できる（『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年、『平城木簡概報11』1977年）。

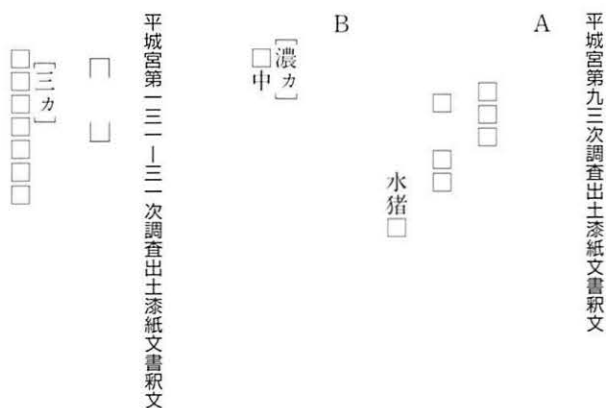
漆紙文書は多くの断片に分離している。これらを接合すると11片の断片にまとめることができるが、断片相互の位置関係は不明である。漆容器の液面の縁辺部に当たる円弧状の部分が残っており、これから直径を推定すると、約15～18cmと考えられる。11片の断片のうち、墨書は9片のオモテ面（漆の付着していない面）に判読可能な文字を含めて計20字確認できる。このうちまとまった墨書の判読できるA・Bの2片について釈文を別掲した。A断片についてみると字の大きさは約1.4cm四方、行間は約1.9cmである。界線、印影、紙背文書などは確認できない。

第131-31次調査出土文書 平城京左京二条二坊十三坪を調査した第131-31次調査（1982年）において、遺物包含層から1点の漆紙文書が出土した。調査の報告は奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』（1984年）において同一坪内の他の調査とあわせておこなっているが、本文書については未報告であるので、ここに収載する。

本文書は漆のパレットに用いたと思われる直径12.6cmのクロメ漆付着の土師器の椀A（平城宮土器IV）を覆っている。紙自体の遺存状況はきわめて悪い。墨痕はオモテ面に2行分認められ、釈文は別掲のとおりである。残



平城宮第93次調査出土漆紙文書(A)



りの良い部分で観察すると、字の大きさは約8mm四方である。界線・印影などは認められない。紙背については水で濡らすなどの方法で観察を試みたが、墨痕は確認できなかった。

第154次調査出土文書 内裏東方を調査した第154次調査において、この地区を南流する宮内の基幹排水路であるSD2700から1点の漆紙が出土した。これも未報告資料である。同じ溝からは漆塗用刷毛のほか、1778点の木簡も伴出している（『昭58平城概報』1984年、『平城木簡概報17』1984年）。

この文書も漆のパレットに用いたクロメ漆付着の土師器の杯を覆っているが、完存せず、本来の直径は不明である。残存部分は約9cm四方の断片となっている。墨痕は確認できなかった。

（古尾谷知浩／平城宮跡発掘調査部）